カンボジア色に染められて

アジア文化学科4年　福田　桃子

はじめに―カンボジアサーカス学校とは？

今回日本ツアーを行ったカンボジアサーカス学校は、バッタンバン州オチャ市アンチャン村にある。サーカス学校のほか、音楽学校、絵画学校、孤児院などを併設、 NGO組織Phare Ponleu Selpak（PPS:ファー・ポンルー・セルパク）が教育活動を続け、地元の子どもたちの育成、自立支援の一役を担っている。８月１日の筑女学内公演を中心に紹介しよう。

Ⅰ　事前準備

まずは学内でのスタッフを集めるため、いくつかの授業でのチラシを配り、アピールタイムをいただいた。メンバーが集まってからは、「絵の具キャンペーン」用品、学内ポスター作成、当日の受付分担、買出しなど、何度も話し合いを重ねながら準備を進めた。絵の具キャンペーンとは、家で眠っている画材を、PPSの絵画学校の子供たちに寄付しようという活動。市役所や他の市施設、太宰府市内の小・中・高校全校に回収BOXを設置した。筑女でもBOXを設置したところ、予想以上に集まり、感動した。太宰府全域からダンボール20箱分ほど集まり、空輸時に追加料金が発生しないか冷や冷やするほどだった。

Ⅱ　筑女での授業公演

当日８：30、飛翔会館に私を含む筑女および他大学の学生スタッフ、本公演をサポートするカンボジア通の方、そして大津先生と横山先生の15名が集合した。まずは控え室作り。机を移動し、椅子を運んだりしているとき、ふと気づいた。お出迎えに行かなければ、と思い階段を駆け下りて行くと、ちょうどサーカスメンバーの一人目が到着したところだった。彼らは２日間だけホームステイをしていたので、宿泊先から、ご家族の方に９時に送って来てもらうことになっていた。次々と車は到着、続々とメンバーが集まってきた。私は車から降りてくる彼らの表情を見て、安心した。前日のホームステイ先との対面式の時には、楽しそうではあったが、明らかな不安が見えて少し心配だったからだ。そんな私の心配をよそに、言葉こそないものの「いってきます」「がんばってくるんだよ」と、

にこやかにコミュニケーションをとっていた。昨晩の、彼らを温かく迎えた家庭の様子が易しく頭に浮かんだ。

PPSの代表やツアースタッフ、サーカスアクト・楽器隊のメンバー、全員そろったところでステージのチェック。前日に厚いマットを敷いていたのだが、滑らないかどうかなど気になっていた。ここでも私たちの心配をよそに、彼らは「OK、OK」。すぐにストレッチや楽器のセッティングなどを始めた。あの時は「おいおい大丈夫かよ〜」と思っていたが、先日PPSを訪れて、謎が解けた。彼らはどんなところでも、出来てしまうのだ。もちろん、アーティストとしてベストな状態というのはあるようだが、板張りのみのステージでも、狭いスペースでも、街中のアスファルトの上でも、その芸を披露。だから、今思うと、本当にOKだったのだろう。

授業公演は私が感じた限りでは、とても盛り上がり、前半の講演部分もみな興味深く聞いていた。精一杯準備してきた甲斐があったと思った。公演後にアンケートをみて、とてもいいものが出来た、と再確認できた。みなさんの心に、彼らの笑顔、エネルギー、躍動感がストレートに響いたのだろう。

公演後の茶話会も大盛況。メインイベントの特大スイカ割りは、異常な盛り上がりをみせた。彼らは、10回まわっても難なく真っ直ぐに歩いて、見事な距離感で止まり、木刀を思い切り振りかざす。次の瞬間、スイカはきれいに真っ二つだった。スイカはもちろんおいしくいただいたのだが、あまりの大きさに、平らげるのに苦戦。食べたり飲んだりが落ち着いたころ、なんとなく撮影会のような雰囲気になっていた。とても楽しい国際交流の場になっていたのは間違いないだろう。

Ⅲ　その後の私

太宰府に、台風を呼び(8　2 台風５号福岡直撃)、自らもカンボジアサーカス旋風を巻き起こしてくれた彼らに、感謝しながら、私は会計処理をしていた。通訳スタッフの携帯電話から、「今から広島公演スタートだよ」など、何度もテレビ電話がかかってきていた。数日後、思いあまってボスへ連絡、「いてもたってもいられない、とにかく力になりたい」。

8／10 の大阪公演からスタッフとして迎えていただき、山梨・群馬・東京と、残りの日本ツアーを最後まで一緒にまわった。どこに行っても変わらない彼らの笑顔や躍動感溢れるショーに毎日触れ、それをサポート出来る自分に幸せを感じながら働いていた。そして、ある日気づいた。彼らと共に過ごした長い間に、忘れていた。彼らは戦災孤児であったり、昔はストリート生活をおくっていたという様々なバックグラウンドを。ある時はサーカスアーティストとスタッフとして、ある時は友達として接していた。だから、私はすんなりカンボジアにPPSにいこうと思えたのかもしれない。

ツアー終了の８ヶ月後、2008/4/1～8、PPSで開催された、第５回カンボジア国際サーカスフェスティバル"Tini Tinou" (クメール語で、「ここあそこ」という意味) にスタッフとして参加させていただいた。日本ツアーに来ていた"Holiday"という演目のメンバーとの再会、その家族や友人たちとの新しい出会い、フランス・ドイツ・ポルトガル・タイ・ヴェトナム・ギニアから来ていたサーカスアーティストやスタッフとの触れ合いに幸せを感じながら、私はせかせかと下働きをこなしていた。

ツアー同様、とても楽しい環境で勉強が出来、最高だった。しかし、気がかりなことがひとつ。PPSのボスと、長年PPSを支援しているNGO Enfans refugies du monde(フランス語、「世界の難民の子供たち」という意味) のボス、日本ツアーを敢行したACCという制作会社のボスが、ボス・ランチ会議をする際、同席させてもらい、来年このフェスティバルを開催することが、資金面において苦しいことを聞いてしまったのだ。

私は今、自分に出来る資金集めをすることを目標にし、来年のカンボジアでの自分を思い描きながら、すっかりカンボジア色に染まった学生生活を送っている。